

なぜ、ボランティアに参加したの？

欧 静寧
JINGNING OU

なぜ、ボランティアに参加したの？…この問題に思い込んだ今、私は7月豪雨災害の被害地である人吉市に向かっている車に座っています。最初のボランティア活動は豪雨からもう2週間目ぐらいの7月25日です。その時、市街地はほぼ平静に戻ったが、窓外から目に映したの光景に驚き、私と日本人の学部生4人を載せている車の中にも静かでした。なぜ、ボランティアに参加したの？この問題私は自分に聞きたいし、コロナ禍の中に複雑な手続きをやらさせでも参加してきた日本人学生にも聞いてみたいです。

最初思った私がボランティアに参加する理由は「恩返し」です。災害発生後、学校からボランティア募集の誘いを見せてから、応募しました。但し、ボランティアに参加すること決めたのは12年前の2008年5月です。パンダの故郷でもある母国の四川省がマグニチュード8級の強い地震が起き、死者不明者は8万人以上であり、多くの命を奪う大惨事だと報道されました。かなり遠い福建省にいる私はニュースを通じて、被災地の激しさを感じました。残酷な画像をみるのは怖いですが、それでも新しい生存者がいるかどうか知りたかったので、ニュースを注目続けていました。地震後に一人で自費できた日本人のおじさんや各国の専門家である救助隊など国内外の人々が被災地へボランティアしに行ったと報道され、被災地で熟達に働いたり、亡くなった方々のために手を合わせて黙祷したりしている姿をニュースで見て、当時受験生で行けなかった私が泣きながら、将来にボラ

ンティアとして被害地に応援するときめました。今年留学生として熊本にきて、豪雨災害を知り、土木専攻にあたる自分にとって、勉強にも「恩返し」の機会にもなると思って応募しました。但し、5ヶ月間のボランティア活動を通じて、ボランティアに参加する理由は変わってきたようです。

この5ヶ月間に印象が深いのは悪天気下の作業の辛さではなく、印象が深いのは：泥に覆われた家の前に立て、屋根に仮寝中の白いネゴを指しながら「家族みたいなネゴちゃんが豪雨のときに迷ったが、昨日戻ってきた」と語るおばあちゃんの笑顔であり、70歳でも真面目に泥出ししていた天草市のおじさんの姿であり、コロナ禍の中に、いろいろ対策しながらボランティアセーターを運営する、ボランティアに参加する人々であります。だから、その理由は決して「恩返し」だけではなく、ボランティアの元気一杯な姿で住民達を励ますことにもいえるでしょう。「災害には国も民間もない、ましてや国家体制やらイデオロギーなどとは無縁の世界である」という話に賛成します。それこそ、ボランティアはひどい状況の中のいいことになって、そうやって人は先に進んで行けるんでしょう。

「あ！始まりました！」とメンバーの声にかけられ、現実に戻りました。さて、今年最後のボランティア活動が始めた、今日はどんな方に会えるのだろう。